クーゲルシュライバー！

織部鶉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クーゲルシュライバー！

【Ｎコード】
Ｎ２６８２Ｚ

【作者名】
織部鶉

【あらすじ】
「これ……美靴のニーソックスだろ」
落ちていたニーソックスを拾ったちょっと強烈な匂いフェチ男子”常葉　出水”は、それを落としたと主張する見覚えのない女子生徒に向かって言う。動揺する彼女は会話の果てに告白した。
「わ、わたし……彼女の事が本気で好きなの！！」
男の人格を持ち合わせる彼女”綿峰　ちこり”は、同級生の女子に本気の恋をしてしまっていた！

友達の伝手や因果で手伝う事になってしまった出水は、ターゲットを部活動に取り込むために挑戦した事もないライトノベルを書く事になる。しかしそれをちこりに提案した途端、彼女の顔色は一気に怪しくなってしまい……

青春振投げ捨てラノベ書く？　クーゲルシュライバー！　始まります

プロローグ

プロローグ

>i36815|2883<

「それだけは……絶対に嫌だっ！！」

教室というには設備がお粗末な旧校舎の一室で、突然彼女は机を叩いて立ち上がった。

「ラノベなんか……臭くて、ダサくて、欲望だけは一人前のキモオタが読むものだっての……。それを作ったりしてる奴らなんかは、碌でもない妄想をトレンドだと言いたげにゴミを量産し続ける……。そんな職を目指す奴に至っては、何も出来ないクズのクセに、小学生以下の文才でゴミを他人に送りつけ、その程度で人の上に立つ事を妄想しているんだ！！」

《綿峰（わたみね）　ちこり》は背中の中程まで伸びた髪をブワッと逆立たせ、怒りに歯を軋ませながら唸っている。まるで人が変わったようだった。

「お、落ち着けってちこ！」

そんな彼女の変貌に驚きつつ声を掛けてみるが

「っさい出水（いずみ）！！」

張り上げられた怒声に、情けないながらも怖気づいてしまう。

初めて会ってからそれほど時間は経ってないが、俺の知る限りちこりはこんな口調で話すような子ではなかった。もっと大人しいどころか、むしろ控えめ過ぎるとすら言える子だった。

「あれれー……何かこみみ、聞き逃しちゃいけないような言葉が聞こえたなぁ……」

部屋の中央に四つの机と椅子が寄せられている中、１人だけロー

ラー付きの回転椅子に座っていたツインテールの少女、《猫井（ねこい）　こみみ》が不穏な声を口にする。彼女が椅子から降りると、その様子を鋭い目つきで見ていたちこりが顎を引いた。
そして、野良の子猫でも見ているかような口調で言ってしまったのだ。
「……小っさ」
プチン、と何かが千切れた様な感覚が俺のところにも伝わってきた。
「あぁん！？　今こみみのブチ切れランキングを1，2フィニッシュしやがったなこんにゃろ！！　ラノベをバカにするのは単に良さが分かってないだけだろうけどね！　今！　こみみが小さいってのは！！　関係ないでしょうが――――っ！！！！」
こみみは使っていた回転椅子の上にサッと飛び上がってから、内部にある支柱スプリングの力を利用してちこりに飛び掛かろうとする。
「ん〝にぁっ！？」
しかしどこにも問（つか）えていないローラー付きの椅子を蹴って飛び上がれば、椅子だけが滑ってその場に落ちるのは誰でも判るはずだった。顎から落ちればさぞ痛いだろう。こみみはまさにその恰好で、床に打ち付けた顎をさすりながら目じりに涙を浮かべていた。
「ぎぎぎぃ……」
「……なんだよメスネコ」
今にも取っ組み合いが始まりそうな程に場は緊張していた。とても収拾が付きそうにない。
俺はどうすれば良いかひたすら考えあぐねていた。今二人の間に入っても、出来る事なんてたかが知れている。油を注いでとばっちりを喰らうのはもっと勘弁して欲しい。
しかし俺は一人じゃなかった。机の向かいには、同じようにどうすれば良いのか悩んでいそうな表情をしている女子が座っていた。
「ち……ちょっと2人とも、ここには何のために来たのよ！　ちこ

も急にどうしたっていうの？」
　彼女は意を決したのか、一度唾を飲んでからこう着しかけている二人に声を掛けた。
「ちっ……黙ってろ五木。今お前には関係のない話だから」
ちこりはまったく顔に合わない声色と言葉で、場を収めようとした彼女を威圧した。
「な、なんですっ！　……て、いやいや落ち着け私……」
　黒髪をポニーテールにまとめ上げた彼女《五木（いつき）　一枝（かずえ）》は、頭を小刻みに振るって心を落ち着けようとしていた。一枝は入学以来、同じクラスである為か、ずっとちこりとの友人関係があったらしい。それなら、彼女の豹変ぶりについて知っているかどうかはともかく、この場を収めてもらうには一枝の力を借りるしかなかった。
「と、とにかく、ちこは落ち着いて。こみみも理由ぐらいは聞いてあげようよ」
　あくまで落ち着いた態度を示しながら二人を落ち着けようとするが、当人達は一切一枝に振り向きもせず睨み合う。
「あんたのお願いを叶えてあげるために集まってるんだよ！　見損なったよバカちこ！　バカち●こ！！」
「ギャーギャーギャーギャーとうるせーなメスネコ……！　俺はな、単にラノベを馬鹿にしたいんじゃねえ。俺の経験を以って言ってるんだよ！　その辺のレビュアーと一緒に語んじゃねー！」
「だぁかぁルァ……人の話聞けってんのよゴルァァ！！！」
　いつのまに淑女な態度はどこへやら、一枝はその存在を流された末に、濁流の中へ飲み込まれてしまったようだ。まったく笑えない。
　それから取っ組み合いのケンカに至るまでは数秒も掛からなかった。見た目はちゃんと女の子女の子している三人が、耳を塞がずには居られないような雑言を口にしながら、互いのセーラー服を引っ張り合っている。
　その混戦の中から飛び出たちこりの一言だけが妙に俺の耳に残る。

「こらっ……俺に触んな！！」

俺――と自称する女子は居ない訳ではない。ただちこりの容姿・雰囲気に限っては明らかに違和感があった上、今までは”わたし”と弱弱しい声で言っていたはずだ。これはやはり……そういう事なのだろうか？　いや、この際間違い無いはずだ。

「ちょっと待ってくれ」

俺はゆっくりと立ち上がってからキャットファイトの猛火立つ場所に近づくと、あえて神妙な声色を意識しながら呼びかけた。すると暴れていた三人は、ピタリと手を止めてこちらの方に向いた。俺自身はその反応を見越してやる程の策士ではなが、しかしながらこのチャンスを逃す訳にはいかなかった。

「何よ出水」

一枝はジト目で俺を睨む。一瞬で匙を投げてしまった自分を見てほしくないのか、どこか疎ましさを思わせる眼力を向けてくる。

「……なんなのイズミー」

不機嫌一色といった顔をしたこみみは、口を横長に伸ばしながら鼻にかかった声で言う。

そんな状況下でも確かめる必要があったのだ。この騒動のトリガーを引いてしまった者……綿峰　ちこりの正体を。

「ちこ」

「な、何だよ……」

一度肺に残った全ての空気を吐き出してからちこりに一歩近づく。そしてかすかに漂うチェリーっぽい香りを胸いっぱいに吸いこんでから、俺は彼女との体の距離をグッと縮めた。迫りくる俺に対し彼女はとっさに手を構えてきたが、下段のガードは甘かったようだ。

「うりゃ」

「えっ」

――無い

無い――ない、無い無いないッ！

俺は左手を背中に回して体を寄せ、右手をスカートの中へ一思いに手を突っ込んだ。

すぐに触れたのはやけに柔らかく滑らかな布地。おかしい……どれだけ擦っても、ここにあるはずの“棒”が無いのだ。

「あぐっ……！」

息を気管の途中で詰まらせたような声を漏らす彼女。俺はただただ不可解だった。ちこりの唐突な変貌、口調の変化……その原因はこう考えるしかないはずなのに。

「お前……女装した男じゃなかったのか？」

……どこからかカウベルの間抜けな音が聞こえた気がした。

そうだよ、変装した男じゃなきゃおかしいはずなんだ。初めて俺と会ったときだって、今に至る理由や目的だって、ちこりが女装をした男と考えれば全てつじつまが合う！　それを立証するための一番確実な方法を、俺は今、正直に、確実に試しただけだ！！

「ひっ……あぅ……」

ふと顔を上げると、彼……ではなく彼女の大きな目にじわっと涙が浮かんだ。手をスカートの中に突っ込める距離なのだから、顔と顔は息遣いが届く間合いだ。少し目を逸らせば、ひくひくと動く鼻の動きまでハッキリ覗える。

俺が“棒”の探索を諦めて手を引くと、ちこりは崩れ落ちるようにしてその場に倒れた。さすがに、いきなり体に触れたらショックなのだろうか。でもち●こついてる？　と直接聞くよりはよっぽど健全だし、答える側のデリカシーは守られるし、その上でとっさの嘘をつく事が出来ない。

しかし、何で俺がわざわざ確かｍ

「どぅばッ！！」

たった1フレーム、俺の視界に四本の鉄パイプ――椅子の足部分が見えた。

次の瞬間、物凄い衝撃が俺の顔面に訪れると共に、意識は肉体の外へと吹き飛ばされてしまった。

……ああ、走馬灯が見える。

＞i36816|2883＜

綿峰　ちこりの告白

《綿峰　ちこりの告白》

満開に咲く桜の美しさは、春の季節を迎えれば誰であれ感じられる。

ただほとんどの人は、その美しい瞬間でしか桜を見ようとしない。散ってしまった花弁が、雨に打たれ茶色く萎びる風景は、誰も記憶にとどめておこうとは思わないものだ。

うちの高校の校庭に植えられた２００本以上の桜は、全国で見ても尋常じゃない咲き方をする。学校の敷地自体が東京都区内のど真ん中にあるにもかかわらず、今年のピーク時には《地上の雲》と称される桜の空撮写真と、花見をさせろと校庭に都民がなだれ込んで来たという出来事がニュースで放映された程だ。

その桜も今となっては見向きもされぬ、もっさりと若緑の葉を纏った微妙な姿をしている。

落ちて腐った花弁は地面の土と合わさり、ずっしりと重くなっていろんな場所に積み上げられている。正直、気持ちの良い光景ではない。

「……何でだろうなぁ、こんな仕事を」

放課後。部活に飛び出す生徒たちをしり目に、俺は竹ぼうきを片手に校舎回りをトボトボと歩いていた。

校舎の隅に寄せられた花弁は、ゴミ袋にまとめて処理場に出さなければならない。その役目は必ず誰かがやる事になる訳だが、俺はこの仕事を今日まで五日間毎日やらされている。

苛められている訳じゃない。確かにクラスで少し変人扱いをされている節こそ有るが、理由はもっと単純――暇な奴、つまりは部活

動に入ってなければ、生徒として役員を務めている訳でもないからだ。
「ここまで来ると慣れたもんだな。よいしょっと」
この手際はそこらの用務員なんかに負けない、なんて一人で意地を張りながら集められたゴミを袋に詰め、それを校舎の壁を背に積み上げる。ノルマを済ませたらあとはひたすらゴミ置き場へと往復するだけ。時折空を仰ぎたくなる程に退屈な作業だ。
「げっ……ここの花弁、雨水吸ったまま乾いてねーぞ」
乾いた状態なら竹ぼうきを振るうだけで片は付くが、水を吸っているとなると話は変わる。地面にへばりついて簡単に取れないうえ、堆積したものに至っては溶け始めた雪の様に重い。
「スコップ先生を持ってくるしかないな。えーとどこかに掃除用具箱なかったっけ……」
クラス会で押し付けられるようにこの仕事を任された時、担任の男は「学校を覚える機会にもなる生徒会役員になる時も有利だぞ」と励ましの言葉を送ってくれた。クソありがたい配慮だけど、俺が役員になることは事情により無理に等しい。信任投票ですら怪しいレベルだ。
その理由は俺自身にある。
自分にとっては普通の事であるが、他人には受け入れがたい行為と趣向らしい。それでも俺は改める気がないから、正直に生きていくにはこうして粛々と押し付け仕事をこなすしかないのだ。

憎らしい花弁どもを片付ける正義の味方（スコップ）はどこに行ったか。たしか二日前使った時にはこの辺りにあったはず……と、まだ慣れない感覚に歯がゆい思いをしながら校舎を壁沿いに歩く。入学したての一年生にはこれだけで十分なストレスだ。
遠目にはコートの中で跳ねたり叫んだりしているハンドボールやテニス部員の姿が見え、後ろの方からは野球部員の不揃いで妙にグルーヴな掛け声が聞こえる。頭上からは吹奏楽部による野太くて艶

のある金管楽器の音が響いていた。まるで青春の一日一秒をこんな事に費やしている俺を嘲し立てているようだ。それから逃れようとしたのか、あるいは本当にスコップのありかを思い出したのか。どっちとつかぬ歩調で辿りついたのは、校舎の北側に当たる湿った日陰の細道だった。

「そうだそうだ、確かこの辺に掃除用具箱が」

都の街と学校の敷地を仕切る壁と、四階建ての校舎に挟まれたこの辺りは、一日を通して日が当たらない為に地面がなかなかぬかるんでいる。当然、こんな暗い所に人通りなんて無いに等しい。そんな所でも掃除してしまおうと思ってしまう俺は、やはり暇人であった。

目的の掃除用具箱を探して心当たりのある所を歩く。他の生徒たちの声は遠ざかり、少し心が落ち着いた気がした。

――そのおかげで、俺の能力はかなり鋭くなっていたようだ。

「あれ……ってもしかして」

＞ｉ３７０２９―２８８３＜

気配を感じた俺はとっさに辺りを見渡す。すると、コケのおかげでぬかるんでいない地面に布っぽい何かが落ちているのを見つけた。やけに縦に長い黒色の生地……普通の人間には一瞬で理解出来ないだろう。

だが俺には解る。その布に染みついた、芳しい匂いを感じ取ったが故に。

「……何でこんな所にニーソが落ちてるんだ」

布を手に取ってみると確かにそれはニーソックスだった。ユニクロ製ではない。真っ黒と言うよりは少しだけ紺に近く、かの二枚組４９０円よりもさらに滑らかな肌触り。だらんとぶら下げてみると、指先や太ももにあたる部分には使用感のあるシワがはっきりと浮かんでいた。

「ほう、なるほど」

一人でうんうんと頷いてから肺に残った息を全て吐き出す。
たまらん、正直。
使用済みのニーソックスを拾って興奮しない男がどこにいるのだろうか。使っていた人間が分からないなら尚の事良い。好き勝手に妄想すればこのニーソックスは何にでも昇華できる。
だがそれは一般人の話だ。俺はこの能力を以って凡人の向こう側、一歩先へと踏み出せる。

カサッ、という足音。
「あ、あの！　その……その靴しっ、それは……！」
＞i37030―2883＜
どもった女の子の声が聞こえてふと我に返る。どうやら俺は全神経を右手に持っているニーソックスへと向けていたらしい。そんな隙を見せていた所に、俺の獲物を横取りに来た女に呼び止められてしまったらしい。
「……こほん。えっと、何の用？」
「その、靴下というか、ニーソックスなんだけど……」
「ダメだ」
「えっ！　あの、それ、え！？」
ハイエナ対しては毅然とした態度が適切だ。少しでも気を許せばどこを噛まれて獲物を取られるか分かったものじゃない。
「いやその、それ……私のニーソ……」
そこの言葉に俺は顔を上げ、寄ってきたハイエナ――ではなく、面識のない女子生徒の顔をじっと覗きこんだ。
指定のセーラー服に青いリボン、どうやら同じ一年生らしい。威勢の弱い声や態度を現しているような薄緑の髪は背中の中程まで伸び、もみあげは三つ編みで結ばれている。切りそろえられた前髪の下には大きな目が二つ。口の輪郭は波打っており、なんとも分かりやすい慌て方をしていた。
俺はここに至ってようやく閃く。

「もしかして……これ、君の落し物なのか？」
「そ……うん！　そうそうなの！　それ私が、さっき二階からここに落としちゃって……」
「ふーん。でも今はちゃんとハイソックスを両方付けてるじゃないか」
視線を足元へ落とすと、彼女はこのニーソックスよりも幾分か濃い紺色をしたハイソックスを揃えていた。余分に持っていたニーソックスを落としかのかもしれないが、かといってこいつが“ハイエナ”であるかどうかの疑いが晴れた訳ではない。
「これはその……えと、わたしの替えなんです、そのニーソは」
「へぇ……」
まったく予想通りの回答。いいだろう、そうと来るなら確かめてやる。
「ちょっと失敬」
「あっ！？」
素早く息を吐き切ってから、俺は手に持っていたニーソックスを鼻に押し付け、穴の中へと吸い込まんとする勢いで匂いを嗅いだ。目の前の女子生徒は単なる驚きか、それとも生理的嫌悪か、強い反応の声を発したが今の俺には関係ない。
答えはこの布に染み込んでいる。
「この匂い……ん――はッ！？」
鼻腔の粘膜から電流の様なものが走り、全身を駆け巡る。
俺は単純に確かめようとしたのだ。匂いはその人が持つ個人の鍵のような物。このニーソの匂いを確かめ、彼女の靴下も拝借して確かめれば、俺は非礼を詫びニーソックスを返さなければならない。
その鍵を嗅ぎ分ける特殊能力が俺にはある。もっともそれは女性の体臭と限られているが……今はそれどころじゃない。
これは感じ取った匂いではなく、言葉で確かめなければならない。
「本当に君のニーソックスなの？」
「そ、それは……その……」

「……この匂い。君が本人でなければ、俺の知る友達のものとしか思えない。もう一年以上会って無いから今何をしているか分からないが……よっぽどないとは思うけど、確かめるために君の名前を教えてくれないか？」
「はえっ！？　う、うぅ……」
明らかな動揺。俺はその反応を見越していた。
“俺の知る友達”の姿は、今目の前にいる女子生徒とは見た目も雰囲気も違う。俺が中学二年生の時に転校して以来会ってないが、たった一年でここまで身長も顔も変わるはずはない。いくら女性の見た目にはまったく興味が無いとはいえ、記憶力まで鈍った訳じゃない。
「本当の事を言ってくれないとどうにも出来ないぞ。別に警察や先生へ突き出したりはしないから名前くらいは教えてくれよ」
「ち、ちょっと待って！　今どこかに突き出されて困るのはどう見てもあなたでしょ！　あああなたから先に名乗ってよ！」
彼女は顔を真っ赤にし、カミカミな口調で吠えてかかる。そろそろ決着のようだ。
「俺は一年A組の常葉　出水、ちょっとした匂い好きだ。どちらかが困るのだといいたいのなら、別に今から職員室に行っても良いんだぞ？　俺の能力についてはもう一部の生徒や職員たちに知れ渡っている。このニーソの履き主が別にいると証言することも出来るし、信用に足る立証は済んでいる」
「くっ……！」
「ほら、俺は名乗ったぞ。だから急に先生達へ突き出したりはしないから、名前を教えてくれ」
慌てる態度を見る限りどうにもならなさそうなので、一旦落ち着かせるために声の調子を落とす。逃げられでもしたら面倒な事になりかねない。
「わ、わたしは……B組の、綿峰（わたみね）　ちこり……」
判ってはいたが、その名前は俺の知る友人のものではない。同時

に本当のニーソックスの持ち主でないという事も確定したが、また別の問題が生まれてしまった。
「あれ？　じゃあ何であいつのニーソがこんな所に落ちてて、君が拾いに来たんだ？」
「それは……そ、そうです！　みくちゃんが落としたニーソをわたしが拾いに来たんです！」
「さっきと言ってる事が違うじゃないか」
「うっ……！」
完全にボロは出切った。
だが彼女――ちこりはもう一人の名前を挙げた。その名前はまさに……
「“みくちゃん”って……まさか、澄川（すみかわ）　美靴（みくつ）の事か？」
「え、何であなたがその名前を？」
一瞬彼女の言っている事が信じられなかった。俺が転校して以来、彼女の動静は全く耳に入ってこなかった。ちこりの言っている事が本当なら、しばらく見ていない澄川　美靴本人が、この学校に居るという事になる。唯一俺の趣向を理解してくれる友達として、気にならない訳がなかった。
「ちょっとどこに行くんですか！」
身を翻した俺の腕をちこりがとっさに掴んで掛かる。
「何だよ綿峰」
「どこに行くのかって聞いてるんです！」
「中学の友達というか、幼馴染に会いに行くために理由が要るのかよ」
「え、幼っ――いや今はそうじゃなくて！　ちょっと待って欲しいんです！」
引っ張る腕にあまり力は入っていなかったが、必死過ぎる大げさな身振りについ足を止めてしまう。
「安心しろ、このニーソはちゃんとみくに返すから」
「かか、勘弁してくださいぃ！」

「おまっ……もしかして」
　ニーソックスは返して欲しいのに、持ち主である本人へ渡す事は拒む。つまる事それは
「……黙って持ち出してきたのか？」
「あああああああっ！　あっ！　あの！　ちょっとだけ、ちょっとだけさっきのあなたみたいに、みくちゃんの匂いを楽しもうと……！　それで窓際まで持ってきたら、つい手が滑って落としちゃって……」
「なんだお前もだったのか。その事情だと、確かにみくへ知れたら都合が悪いな」
「というかあなたも勝手に持っていくつもりだったんでしょ……？　だから、今このやり取りは無かった事にしよ？　ね？　その方がお互いの為になるし……」
「いいや。女の子同士ながら靴下の匂いを嗅ぐくらい、変人と思われる程度でさほど問題じゃないだろう。俺は命も名誉も青春も賭してこの匂いを求めていると言うのに」
「そこアピールするところなの！？　でも何だか負けた気がする……じゃなくて！　とにかくみくちゃんの所へ行くのは待って欲しいの！」
　必死過ぎるちこりに再び正面で向き直すと、彼女は掴んでいた腕を放してくれてから視線を地面へ落とした。散々叫んだ挙句落ち込んでいるらしい。
「……で、今は待っても俺はいずれみくに会いに行くぞ。同じ学校に居るってのに挨拶もしないのは心地が悪いし」
「ダメなの！」
「えぇ……？　何で今日会ったばかりのお前にそんな命令をされないと」
「だって……だってわたしは……」
「おう、何だ」
「……聞いて、くれる？」

「だから聞いてんじゃん」
「幼馴染ならいろいろ知ってるんだよね？」
「まぁな、幼稚園の頃から一緒だし」
「そんなに付き合い長いなら、私に協力してくれるよね？」
「当たり前だろ。小学校の時なんかみくがトラブル起こしたとき、代わりに俺が上級生にボコボコにされたくらい後ろに付いて周ってたくらいだ」
「あ、ありがとう！　なら私ちゃんと言うね……！」
「ちょおおおおい待てよォ！！　今なんか変な事頼みやがらなかったか！？　お前とは初対面も良いところだろ！」
上手く気を逸らされたのか変な同意をしてしまった。ただそれで俺が死ぬわけじゃない。
ただ無視すればいいはずだったが、この女は続けて言い放ちやがったのだ。
「わたしは……みくちゃんの事が――本気で好きなんですっ！！」

五木　一枝の憂慮

《五木　一枝の憂慮》

……言ってしまった、つい勢いで……。

わたしこと綿峰　ちこりの気分は最高に複雑です。

確かにチャンスは手に入りました。けれども、今まで誰にも明かした事のなかったこの気持ちを、よりによって拾ったニーソックスを嗅ぐような変態に教えてしまうなんて……。

それは昨日の出来事。わたしはいつものように、一年C組にいる大好きな澄川　美靴ちゃんを見るために教室を覗きました。一年生の教室は二階にA、B、Cと並んであるので、B組であるわたしが用無く覗いても別に怪しまれないのです。

女の子同士なのだから普通に会って友達から始めればいい……と同級生の子は言うのですが、恋人として意識している私にとっては超えられないハードルがありました。

だから、覗きに行っても話しかける訳じゃありません。ただ遠くからその可愛らしい後姿をじっと眺めているだけ。今の私にはこれが精いっぱいで、なおかつそれで満足なのです。

五時間目の授業が終わってから帰りのHRまでの微妙に空いた時間。わたしの席の前に座っているポニーテールの女の子が、くるっと振り返ってから声を掛けて来ました。

「なーに変な顔してるの、ちこ」

「あ、一枝ちゃん」

決して明るくはなく、友達も多くないわたしにわざわざかまってくれる子。みくちゃんとの仲について相談に乗ってくれる頼もしい

人。それが今話しかけてくれた人“五木　一枝”ちゃんです。
「い、いやいやいやなんでもないですよ！」
「ふーん……ちこがはっきり否定するときは絶対何かがあるんだよね。もう一回質問してもいいの？」
「うぅ……」
　この高校に入学してからずっと一人ぼっちだったわたしに、一枝ちゃんは今みたいな調子で話しかけてきてくれました。ちょっと押し気味だけど決して強引じゃない優しい声。返答に困ったりはするけれど、わたしにとってはそれがちょうど良いみたいです。
「それが、みくちゃんの事なんだけど」
「澄川さんと進展あったの？」
　彼女はわたしが『みくちゃんと友達になりたがっている』と純粋に思ってる。それで間違いはないんだけど、実際はもっと別の次元。恋という普通の感覚を超えたもの。
　唯一と言える友達の一枝ちゃんには、女の子が好きと告白して嫌われたくない。変な奴と思われたくないから、あくまで建前を挟んだ上で以前から相談していました。
「進展と言うか……協力してくれる人が増えたの。昨日放課後に……」
「あぁそうそう、昨日はごめんね。姿が見えなかったから私一人で帰っちゃったけど」
「わ、わたしこそごめんね！　ちょうどその時、協力してくれる人と会ってたから……」
「そうなんだ。で、どんな人なの？」
　一枝ちゃんは体をこちらに向けて、まったく疑いのない目でわたしの顔を覗きこんできます。
　……間違っても『みくちゃんの姿を覗きに行ったら教室には誰もいなかった。でも彼女の机の上に使用済みらしきニーソックスが置いてあったから、ちゃんと返すつもりで拝借して窓際で匂いを嗅ごうとしたら外に落としちゃった。それで私と同じ目的でニーソック

スを拾った男子がみくちゃんの幼馴染と知ったから、わたしの方から無理矢理協力をお願いした』だなんてし正直に言えるわけがない。言った日にはもうお嫁に行けない。

「えーと……そ、そう！　同級生の男子なんだけど、みくちゃんと幼馴染でいろいろ話を知っているみたいなの」

「へー、男の人ね……」

なぜか一枝ちゃんが声のトーンを一つ落とした。何か地雷ふんじゃった？

汗がひよひよと滲むほどに緊張する。どうか変に感づかれないように……。

「何ていう名前の人？　分かるかもしれない」

出水くんにも協力してもらうなら隠し通す事なんてできないし、それよりも一枝ちゃんに嘘ばかり付きたくなかった。たぶん、名前くらいなら大丈夫だよね。変な噂を聞いていたとしても、まず誤解を解くところから始めればきっと一枝ちゃんも受け入れてくれるはず。

「一年A組の常葉（ときわ）　出水（いずみ）くんって人」

その名前を口にした瞬間、何故か周りにいた数人の生徒までもが身を強張らせたような気がしました。そして言葉を向けた一枝ちゃんに至っては、まばたきもしないまま顔を硬直させてる。率直に、銅像になっちゃったかと思う程動きません。

「か、一枝ちゃん？」

「……」

ふと右隣にいた女子生徒たちの声が耳に入ってきました。

「やだ、あの変態また何かしたの？」

「最近は静かって聞いたのにただ潜伏していただけみたいだね……」

言葉に出さないクラスメイト達も一様に不穏な顔色をしていました。正直彼の事は全く知らないから、まるで私だけが取り残されて

いるような空気に。
「あの……一枝ちゃん？」
「……う」
「う？」
第六感が体内にビリビリと電流を発生させている感覚がしました。次の瞬間、一枝ちゃんはわたしの両肩をとっさに掴んでから大口を開きました。
「うわあああああああああ！！」
「なっなな何！？」
「ダメ！　ゼッタイ！」
「え、えっ？」
「あいつだけはダメ！　絶対に絶対にずぇーったいに——ああもうやだやだやだ名前を聞くだけで生理不順になりそう……」
「どうしたの急に……」
「ちこは知らないの？　常葉　出水の変態さを」
そこに関しては知っていると即答出来るはずでした。ただし建前を考えて
「まぁ……確かにちょっと変わってるとは思うけど」
「ちょっとどころじゃないって。いい？　あいつは——」
「帰りのＨＲはじめますよ」
一枝ちゃんが何かを説こうとしていた所に、女性の担任がＨＲのため教室に入ってきました。彼女は一度大きく深呼吸をしてから「また後で」と言って前に向き直します。
わたしは突然の大声に驚いて肩をすぼめた姿勢のまま“黒いアレ”を片手に持って話す先生の姿を見ていました。
「昨日通知した通り、今日で部活動の新入部員勧誘活動は終わりよ。ただ部活動への入部や新設に関しては何時でも可能だから、その際は代表者と部員を揃えた上で先生に相談してね。それと、よく先生たちに無理を言う子がいるけど、新設に関しては手続き以外一切手

を貸しませんからね」
ここ《物語（ものがたり）高校》は、東京都新宿区にある私立高校。表面的には生徒の数がちょっと多いだけの高校だけど、実際にはもう一つの特徴があります。
「決して意地悪じゃないからね。先生たちも忙しいし、少しひいきをしたらこの学校全体に迷惑をかける事となるわ。うちの高校は特にそのバランスに気を使うからね」
それは部活動がいろんな方向に盛んな事。普通の部活動はもちろんあるけど、それ以外にちゃんとした部員と公的な活動目標があるならどんな内容でも部活を新設出来る。部室がもらえるし部費も出る。何か目的のある人にとっては、ものすごく特別なシステムであるとはわたしも思うところです。
「では以上で今日のＨＲも終わり。みなさんこの後もがんばってください（・・・・・・・・・・・・・・）」

先生の挨拶はいつも通りです。
普通だったら「気を付けて帰ってね」とかだけど、物語高校の生徒はほとんど部活動に入っています。しかも活動を続ける為にみんな必死だから、先生の挨拶はこの場において一番自然なのです。
当然部活をしていない生徒を蔑ろにしている訳じゃないとは思います。でもどこにも所属していない生徒に対しては、やっぱり村八分にされているような風潮がある気はしたのです。
「それで……何の話だったっけ？」
わたしは特にやりたい事もなかったから部活動に入らなかっただけだけど、一枝ちゃんは別に用事があるから所属しなかったと言ってました。そんなわたしたちは村八分同士、自然と一緒に下校するのが習慣になったのです。
「あーそうだった……思い出したくなくてちこに言うべき事も忘れてたよ」

それぞれの場所へと走る生徒たちを横目に、わたしと一枝ちゃんは廊下を歩いて生徒玄関に向かっていました。
「えっと……何があったの？」
「あったも何も――はぁ……ちこ、身体検査の時に休んでたでしょ」
「そういえばそうだったかも」
四月の中旬に新入生対象の身体検査を一斉に行ったらしいけど、わたしはその時体調を崩していて、治った後に一人だけで検査してもらった。だから正直、あまり記憶に残るような出来事じゃありませんでした。
「その時にあいつがやらかしたのよ。……この際単刀直入に言うわ。常葉　出水はね、尋常なレベルじゃない匂いフェチなの」
……それも知ってる
「それだけならまだ許せたわ。でもあいつ、私が教室に置きっぱなしだった下のジャージと、そ……その、替えのパンツを……手に取ったその場で思い切り嗅いだのよ！」
あれー……出水くん以外にそんなような事やりかけた人、昨日見た気がする……。
「信じられないでしょ！　人の鞄をあさった所から完全にアウトなのに……いや、今思えばそれだけなら全然許せたわ」
「え？」
「現場に遭遇した私は柄にもなく悲鳴を上げたわ。自分のパンツを思い切り鼻に押し当てられてる光景を見たら無理もないでしょ」
わたしだったら気絶するかな……。
「それで、叫び声を聞きつけたクラスメイトたちが一斉に戻ってきたの。それで全員が出水の方を見るわけ。ここであいつが観念して土下座でもすれば良かったのに……」
一枝ちゃんはしばらくの間を置いてから、少し鼻息を荒くしつつ言いました。
「あいつは……あいつは、私のパンツを片手に持って「これちゃんと洗ったか？　少し匂いが残ってるぞ」……って言ったのよ。それ

も、クラスメイトの男子女子がほとんど居合せているような所で……！　何の臆面もなく……！！」
ご愁傷様としか……いや、さすがにそれは出水くんが悪いです。
「それで一週間の停学。処罰の軽さには納得してないけど、少年院にでも送られたら私の心地が悪いから一応それで納得した。前から女子の衣類を勝手に嗅ぐような異常行動を繰り返していたみたいだけど、それ以来奴は完全に変態扱い。その上でいつもニコニコしているから気味が悪いわ。ああいう顔なんだろうけど……」
確かに、一枝ちゃんから聞く分には擁護する気にもなれないとは思うけど……それでも私には、みくちゃんへ近づくために彼の力が必要なのです。
「でもさ、わたしは……」
「いい？　とにかくちこは絶対にあいつへ近づかない事！　同類に見られたら一生澄川さんと友達になれないよ！」
「それなんだけど、出水くんとみくちゃんは中学生の時から仲の良い友達で……」
「いやいやいや、どうせちこと仲良くなりたいが為の出まかせよ。何か証拠でも出したの？」
わたしが勝手にみくちゃんのニーソックスを取った事を、匂いを嗅いだだけで判別した……だなんて言えるわけがない。今はとりあえず話を逸らせるものが――

「あ、ちこにずっちゃん。よっす」

今一番現われちゃいけない様な人が来てしまいました。
「……どの面さげて私をあだ名呼ばりしてんのよ出水。そもそもそのあだ名は嫌なのに」
生徒玄関で鉢合わせた出水さんは、まるで友達に話しかけるかのような口調と笑顔で、一枝ちゃんをあだ名で呼びました。さっきまでの話からは少し想像しにくい光景です。

「そう言えばちょうど良いところに出くわしたわね出水」
「え？　何か良いことあった？」
「とんでもない……あんた関係で良い事なんて一つもないからね」
「俺はあるけどなぁ。今日もずっちゃん良い匂いだし」
「……まったく反省していないようね。とにかく話は全部ちこから聞いたわ。その上で、今後一切この子には近づかない事。いいわね？」
「もしかして昨日の事？　うーん……でも俺は頼まれた側だし」
「それはちこがあんたの事について知らなかっただけ！　わかった？　じゃあ帰るよちこ！」
「わぁちょっと待って一枝ちゃん！」
一枝ちゃんが私の右手を引っ張り、さっさと靴を履いて外に出るよう促します。流されるままの私は下手に反抗も出来ませんでした。

「あれ？　一枝ちゃん今日はこっちから帰るの？」
「ううん、単純にちこが心配なだけ。何となく予感がするの」
家までの帰り道。私の家は山手線に乗って２駅先にあるマンション。対して一枝ちゃんは、学校から歩いて１０分くらいの場所にあります。それなのに彼女はわたしの後ろにぴったりついてきます。一枝ちゃんが切符買うのを待ったり、いつも車両を待つ所より遠い場所から電車に乗ったり、いつも通りに話をしたり。わたしは単純に、ちょっとだけ違う下校の風景を楽しんでいただけでした。
目的の駅で降りてから改札を通り、構外へと出ようとしたあたり。そこで一枝ちゃんは突然振り返り、呼びかけるような声でこう言いました。
「なぁんであんたがついて来てるわけ……？」
そこでわたしはようやく、出水くんが後ろに付けてきた事を知りました。彼は相変わらず細目をアーチ状に、ニコニコとした表情でこちらに近づいてきます。

「それ以上近づくな！」
「何だよずっちゃん」
「それはこっちのセリフよ。ストーカーまでするのなら、今度は本当に警察へ突き出すよ」
「俺の家もこっちだし」
「はぁ？　また言い訳？」
「うちに上がって確かめても良いよ」
彼は至って普通に答えてます。内心が読めてるって訳じゃないけど、少なくとも疑えるような格好ではありませんでした。
「……はいはい、分かったわ。分かったら付いてこないで。お願いだから私の……」
「生理が何とか？」
「消えろ！！」

出水くんの家は私のマンションからそう遠くありませんでした。直線の道で、おおよそ５０メートルぐらい手前にある小さなアパートが出水くんの家だそうです。
彼はにこやかにさよならの挨拶をしてきたけど、わたしはキリキリと態度が落ち着かない一枝ちゃんを思って何も返しませんでした。
「ちこ、さっき見た通りあいつの家はすごく近いわ。ちこのマンションを特定されたり、登下校の時に遭遇しないように気を付けてね」
「あ……うん、わかった」
「じゃあ私は帰るから。……気を付けてね」
「大丈夫だよ、たぶん」
マンションの入り口で、一枝ちゃんはわたしの両手を握りながら目力を交えつつ言いました。
彼女もまた偽りなくわたしを心配してくれている。なまじそれが伝わるだけに、わたしは複雑な気持ちを抱えながらエレベーターの中へ入って行きました。

猫井こみみの提案

《猫井　こみみの提案》

「……んお、何だこれ」

1年A組の教室。机の中に手を突っ込み授業で使うプリントを探していると、妙に懐かしいものが出てきた。緑色の罫線が引かれた紙面には書きかけの文字がある。

「反省文、一年A組　常葉　出水……ああこれか」

もう一度奥の方へ手を伸ばしてみると、まだビニールの封も開かれていない原稿用紙がゴロゴロ出てきた。

そう言えば一枚の匂いを思わず堪能していた時に、事が大きくなって謹慎処分を与えられて、その時に書かされたんだっけか。たった2枚の反省文を書くのにずいぶん苦労した事を今でも覚えている。その意味では非常に懲りたから、反省文ってやっぱり意味はあるんだな。

「よっ、出水」

名前を呼ばれ咄嗟に顔を上げる。俺の目の前にいたのは、薄い水色の髪をツインテールに結んだ小柄な女子生徒だった。

「どうしたこみみ」

彼女の名前は猫井（ねこい）　こみみ。同じクラスで唯一俺に話しかけてくる、ある意味頭のネジが一つ飛んだオタク女だ。

「これ私がさっきまで穿いてたパンツ、いる？」

彼女は右手に丸めて持っていた青色の横縞パンツを机に置いた。

「……こうお誂え向きに差し出されると困るんだけど」

「やっぱそういうもの？　見えると判ってるパンチラもそうだけどねえ」

そういう話じゃないし――あー……

俺は自分の性癖に素直すぎるせいなのか社会的に非常に不味い事をしてしまったらしく、一枝のように女子生徒から近づかれる事はない。俺が見ていないだけで、物語高校の裏サイト辺りでは死ねだの殺すだの言われてるかもしれない。

それでも俺は困らない。不良にとっちめられている訳じゃないから、普段はおとなしくしているだけで良い。

しかし唯一、こみみだけは臆面もなく話しかけてきて、なおかつ毎度の事妙な振りをしてくる。嫌いという訳ではないが調子を狂わされてしまうのだ。

「冷めちゃうよ？」

「ん……じゃあちょっと失敬」

いくら匂い好きの俺だってモノの選り好み位はする。当然嫌いな女性の匂いだってある。ただ一枝のように目がくらむほど良い匂いだと、かのような問題に発展するほど我を失う事はある。

「んー……？」

非常にやりずらい。今はまだ午前中、授業と授業の合間。他のクラスメイト達はほとんど教室に残っている。そんな状況で、差し出されたパンツを嗅ぐなんて。

「どう、どう？」

「何だこれ……洗剤にしてはキツすぎる匂いしかないし、これ太ももに敷いて温めてただろ」

「すっげーそこまで判るんだ！　さすが出水、ご褒美として今こみみが穿いてるパンツをここで……」

「いやいいよ、俺がいろいろ面倒なことになる」

「そんな遠慮せず」

「いいつってんだろ！」

こんな調子で時たま俺を弄りに来る。匂いはともかく、どこまで本気か解らないのが手におえない。

「それにしても何で判ったかなぁ。このパンツ、雑誌の付録なんだよ」

「今の時代は本にパンツが付いてんのか……？」
「正確にはパンツに本が付いてるような値段だけどね。アキバだとねぇ、冷やしパンツも売ってるんだよ！」
……頭痛くなってきた。こいつが居ると感覚が狂う。
「そういやこの前貸した漫画とラノベ読んだ？」
「貸したんじゃなくて押し付けたもんだろ。一応暇つぶしに全部読んだけど」
「どうだった！？」
こみみは目を輝かせながら顔を近づける。俺は少し後ずさりしながら答えようとすると、横耳にざわざわとクラスメイト達のひそひそ声が聞こえた。
「おい……あんまり俺と居ると、変に噂されて良い事ないぞ」
あまりに親しくされてしまうと、逆に俺は責任を感じてしまう。それでもこみみはニコニコした表情を変えないまま答えた。
「こみみは最初からこみみだし、別に誰だからって態度は変えないからね。たとえオープンオタクでも挨拶さえ出来れば受け入れられるものなんだから。一番ダメなのは「構ってほしくないし！」とか強がってる隠れオタクの方！　ああ言うの見てるとイライラするんだよね」
「……そういう人も事情ってもんがあるんだろ、色々」
「その点出水は自分の欲望に素直だから、こみみの中じゃポイント高いよ」
「はいはいそうですか」
それから適当に借りた漫画とかの話をした。以前からそういう趣味がある訳ではなかったが、家での時間が有り余っている俺にとって、こみみが押し付けてきた書籍の数々はいい暇つぶしになった。帰ってすることと言えば料理や宿題、臭い妹が汚したものの洗濯、それが終わればゴロゴロしているだけ。読み切れないと思っていた本の束はあっという間に崩れた。
「うんうん、出水は偏ってるけど良い趣味してるよ」

「褒めてるのか貶してるのか……」
「もちろんＧＪの方だよ～。今度は女性向けのも読んでみる？」
「女性向けっておま――いや、お前って……」
俺はこの時まで重要な事を忘れていた。
こみみってそう言えば女だった。確かに女性の匂いはあるが、薄いと言うか何と言うか……中和されたような感じがして、その意味では女らしくない。見た目よりも先に匂いで性別を判断する俺からしたら、こいつは重ねて相手にしづらい奴だ。
「こみみがどうしたの？」
「その……うん。お前にしていい質問かどうかは分からないけど、聞いてくれるか？」
「もしかして、Ｂ組のちこりん（・・・・）に頼み込まれて他の女の子との仲を取り持ってほしい、って頼まれた事？」
言葉を返す前にまず自分に訊ねてみた。
俺、こいつにその事いった話したっけ？
「あぁ、こみみがなんで知ってるかって？　そりゃあれだよ出水。“小耳（こみみ）にはさんだ”ってやつだよ！」
＞ｉ３７３６３―２８８３＜
童顔にしたり顔ってこうもウザいのか。
「……挟めるほど大きくなってから言えっての」
「あーんですってぇ！？」
「ぐぇっ！　痛い痛い」
彼女は自分のルックスや振る舞いに自信を持ってるくせに、体が小さい事を指摘するとやけに怒り散らす。今みたいにスイッチが入れば、周りの目を見ずに思い切り俺の頬をつまんで引っ張る。
「悪かったってば！　一応大事な話なんだ。ちょっと廊下に出てくれ」
「ふぇ？」

教室を出るときもひそひそ声を向けられていたような感じがしたが、もうこみみと居る時でもいちいち気にしない。厄介さで言ったら彼女の方が断然上だ。
もう数分で授業が始まるという事もあり、廊下には人影もまばらだった。俺は一度心を落ち着かせてから質問に入る。
「何で俺とちこの事について知っているかってのは深追いしない。その代りお前に、女の子として相談に乗ってほしいんだよ」
「もしかしてちこりんとくっつきたいの？」
いちいちこみみの質問に答えていると前に進まないので
「俺が“ちこ”と“みく”の仲を取り持つため協力する事になったのは、多分お前が知ってる通りだ。でも俺から何をすれば良いのか正直分からないから……その、お前だったら、何をしたら仲良くなるきっかけになると思う？」
「そんなに難しく考える事かなぁ。だって出水と、ターゲットの澄川　美靴ちゃんは幼馴染なんでしょ？　君が直接、彼女から情報を聞き出してちことこみみに教えれば良いんじゃないの」
「何でお前が勘定に入ってるかは置いといて……俺は俺なりに考えたんだよ。みくは昔からフツーの女子で、それは今でも変わってないと思う。それなのに俺と関係がある事が学校に広まったら、きっとあいつの迷惑になるに決まってる」
「なるほどー確かに出水みたいな変態と幼馴染、なんてふれ込みが広まったら大変かもね」
「……何故かお前に言われるとムカつくな。とにかく俺は、なるべくみくに関わらないようにしつつ協力したいんだ。で、何か案は無いか？」
こみみは少し考えるような格好をしてから短く問い返してきた。
「1つだけ確認。出水は幼馴染のみくちゃんに会いたくないの？」
「そ……それは……」
会いたくない訳がない。みくは俺の趣味を理解してくれる数少ない友達の1人だ。普通に会って、久しぶりと言って、1年の空白を

埋められるくらいにどうでもいい話をしたい。でもそれ以上に――彼女へ迷惑はかけたくない。
「じゃあもう1つだけ質問。会いたいには会いたいんだけど、自分からは会えないから、ちこりんに協力するっていう間接的な手段を取ってまでみくちゃんに関わりたいんだ？」
「う……」
こいつの目は本当に2つだけなのだろうか。そう思うくらいに心を見透かされているような気がする。
「出水の考えてることは大体わかった。こみみが何とかしてしんぜよう」
「ほ、本当か！？」
「うん、良い作戦があるよ。ただし条件が1つだけあるの」
それは？　と無言で訊ねる視線を送ると、こみみは先ほどとは違って見えるしたり顔を浮かばせながら答えた。
「こみみに質問しないこと、いい？」

綿峰　ちこりの挑戦

《綿峰　ちこりの挑戦》

「それではその……よろしくお願い、します……」

「うーんと、こちら……こそ？」

俺は玄関で立ち尽くした。

目の前には綿峰　ちこりが、カーペットに膝を揃えて頭を下げている。まるで新婚夫婦のお出迎え……と連想するのは思考が古いだろうか。とにかくやりづらい。

「それではどうぞ」

ちこりはスチャッと指先を揃え、通路の奥を指し示す。俺は両手の荷物を一旦置いてから靴を揃え、無駄に足音を立てないよう気を付けつつ後ろについて行った。

「うおっ……なんだこの豪華仕様は」

マンションそのものの建構えから想像はしていたが、ちこりの部屋――というか家は、予想を遥かに超すレベルで凄かった。何をどう間違えたら、同じ高校のクラスメイトがこんな豪邸で1人暮らし出来るのか……自分の住んでいるアパートと重ねてみると現実を疑いたくなる。

「とりあえずソファにかけて。紅茶入れるから」

「お、おう……」

言われるがままに綺麗な青色が複雑に編み込まれているソファに腰を折ろす。冬の冷たい便座に腰かける時の様にゆっくりと。

部屋の中心から周りを見渡してみると、尚のこと広さが如実に覗える。南側の窓……と言うよりはガラスで出来た壁というのか。こんなの洋画でしか見たことがない。傾き始めた太陽の光がその窓からたっぷり入り込むため、灯り無しにも部屋の中はかなり明るい。

「はいどうぞ」
「さ、さんきゅ」
真っ白いティーカップ。本当に純白なものだから、高いのか安いのか判らない。妙に恐ろしくなって持ち手が震える。
「そそそれでさ、ちこ」
「はい？」
「えと……俺が礼を言うのも変な気がするが、入れてくれてありがとうな」
「いいえこちらこそ。わたしの無理なお願いを聞いてくれたのですし、こちらも精いっぱい協力するのが筋というものです」
こみみとの約束が交わされたのはおおよそ6時間前。ちこりと美靴の仲を取り持つための作戦は当日中に発動した。その第1弾が今という訳だ。
「それでその……猫井さんが言う作戦ってどういうものなんですか？」
ちこりとこみみは直接の面識こそないらしいが、経緯のおおよそは話している。まだ伝えていないのは、今から話す作戦内容だけだ。
「難しい事じゃない。明日の昼飯になるお弁当を作って、美靴に食べさせればいいんだ」
「へぇー……へぇっ！？」
ちこりは小首をかしげてから大きく目を見開いた。今の内なら驚くのも無理はない。
「こみみが言うには、相手の心へ踏み入るには食事中が一番らしい。手作り弁当なら効果は倍掛け、友達になるなんて余裕らしい」
「でもでも、わたし料理なんてした事ないし……」
「その為に俺がここへ派遣されたんだよ。こみみは身内の手伝いとか言って来れないから、食材とかは俺が全部揃えた。この通り」
そう言いながら肉や野菜がどっさり入った買い物袋をテーブルの上に置く。彼女は袋を覗き込んでから「おー……」と息を漏らし、またソファへと座りなおす。

「出水くんが作ってくれるのです？」
「バカ、俺が作ったら意味ないだろ。俺は自分のを作る片手間に、お前の手料理を手伝うだけ。これもこみみの指定だ。日が暮れる前にとっとと作ろうぜ」
「えっ、ええっと……」
俺がだだっ広いキッチンに食材を運んでいる間にも、ちこりはぐずるような声を漏らしながら後に付いてくる。俺はいつ子持ちになったんだろうか。
「本当に料理した事ないのか？」
「ここのマンション、事前に契約しておけば勝手に食事が届けられる仕組みになってて……」
このブルジョアが。
「はぁ……でも料理なんて簡単に言えば四則演算さ。余計な事さえしなければ、必要な味や見栄えはちゃんと求まる。深く考えなくていい」
「そうなんだ……」

ＩＨコンロのスイッチを入れた頃にはもう日が暮れていた。
おかしい。まさかと思って向かいの壁掛け時計を見ると、もう7時を回っていた。
「これはえっと……熱っ！」
「こら触るなって！　ＩＨだからって表面は熱いに決まってんだろ！」
「ごめんなさい……」
包丁の持ち方――から教えるならこんな時間まで掛からなかったはず。最初に質問されたのは「包丁ってどこで切るの？」というレベルだった。
「もう止めだ。とりあえずリビングに戻れ」
「えっ、でも……」

「いいからほら」
「いやでも、あっ……！」
ちこりは棒立ちしていたせいか、俺が背中を押した拍子にふらっと立ち姿勢を崩した。
「危ねっ！！」
俺はとっさに腕を背中に回す。それから踏ん張ろうとしたが、タイミングが遅れてそのまま体を持ってかれた。
「うがっ！」
「きゃっ」
傾(なだ)れながら倒れる。床に着くまで数コンマもない。このまま行けばどうなるかは想像に難くなかった。
危うくちこりが後頭部を床に打ち付けそうになったところで、俺の腕が衝突を回避させた。……その代り、下敷きになった肘がものすごく痛い。
「うぁえっと……！」
「そそっかしいな。大丈夫か」
一応、本当に大丈夫か確かめるために彼女の顔を見やる。すると大きく見開いた目がうるうると揺れていたのだ。
「わたし……止めたくないです……」
「止めるも何もお前――」
「出水くんがこんなに協力してくれてるのに、中途半端なまま止めたくないんです！」
彼女は芯のある声を張り上げた。
頬をひと筋流れた涙。それは、悔しさを映しているように見えた。
「……何か勘違いしてないか。ＩＨの火傷は普通のコンロよりも危ないから、すぐ休んで冷やさないと不味いんだよ」
「じゃあ……」
「お前こそ最後まで音を上げるなって事だ。この調子だと昼飯のために夕飯を抜くことになるぞ」
「う……うん！」

どうしようもないから目が離せなかった。卵焼きを作るのに1パックすべて使い切り、生ごみが増え、夜中にゴミ置き場へ行ったついで、コンビニへも買い出しに行った。追加の費用は全てちこり持ちで損する事はなかったが、その代りに時間はあっと言う間に過ぎていった。

「……うぅ……」

いつもの布団よりも心地よい感触がした。まだ眠気に淀む瞼を擦り、うつ伏せになっていた上半身を起こす。

「……カーペットかよ」

朝からどうしようもない敗北感を覚える。これが貧富の差か。

とにかく起きないと。その思いだけでのろのろと立ち上がると、テーブルに置いたままだった俺の携帯がバイブレーションを鳴らしていた。学校の時からずっとマナーモードのままだったらしい。

「電話……？　あい、もしもし」

『おにいいいいちゃん！？　やっと出た！　今何してるの！？』

「あぁ水桜（みおう）か……今……？　屈辱的なシーツの上で寝てた……」

『え、ええ……？　もう、お兄ちゃん帰ってこないから私が安心して寝られなかったじゃない。お兄ちゃんの匂いがだいぶ薄くなってるの！　酸欠状態なのぉぉ！！』

「朝っぱらから猿みたいに騒ぐなよ……今は7時半か……俺は家に寄ってから学校行くから、お前は普通に登校しろよ」

「ふぅぇ……？　どうしたの出水くん……」

スマホのスピーカーが音割れする程に妹の声が響いていたせいか、近くのソファで寝ていたちこりまでもが目覚めてしまった。

『はぁっ！？　今女の声が聞こえたよ！　お母さんその年で脱童貞なんて許しませんからね！！』

「誰がお母さんだアホ！　もう切るぞ」

終話ボタンを押すまで声が鳴り響いていたが、最後まで相手をしていたら本当に遅刻してしまう。
「どうしたの出水くん……？」
「何でもない。うちの親よりうるさいのから電話が来ただけだ。ちこもとっとと支度して投稿しろよ。あとアレも忘れずに」
「……アレって？」
「弁当だろ弁当。お前が作った分はちゃんと包んでおいたから、忘れずに鞄に入れろよ。俺もう行くから」
「うん……」
まだソファから離れられない彼女を横目に、俺は適当に荷物を片付けて出ていく準備をする。並べて置いていた自分の弁当を手に取り、鞄を片手に最後の確認。そして玄関へ向かおうとすると、トコトコと歩いてきたちこりに呼び止められた。
「出水くん」
「なに？」
途中で部屋着に着替えていた彼女は、ふわふわとした上着の端をぎゅっと握りながら小さい声で言った。
「……ありがと、付き合ってくれて」
「俺もタダで手伝った訳じゃないしな。気にするなよ」
「それは……何の意味でです？」
「俺にも得があるって事だよ」

学校に遅刻するほど家が離れているならともかく、ちこりのマンションから俺のアパートまでは歩いて3分も掛からない。朝食は無理だろうけど、シャワーを浴びる余裕くらいはある。
「ただいまーっと……」
時刻は7時45分。普段なら妹は部活のためとっくに家を出ているはずだった。
「おかえり、お兄ちゃん」

「何やってんだバカ。とっとと学校行かんか」
「そんなことより。昨日お風呂入った？」
「いや……入れなかったから今からシャワーに」
「入ってない……入ってない……洗ってないんだよね……」
「お、おい。ジリジリと近寄るな」
「にぃぃぃちゃ――――んっ！！」
玄関に、静座で待ち構えていた妹が飛び掛かってくる。相変わらず鼻が曲がるような体臭だ。風呂には入っているだろうが、どうしてもこいつの匂いだけは耐え難い。
「くんなつってんだろアホ水桜！」
「あひんっ」
飛び掛かる妹を両手で押し退け、こいつの鞄もろとも外へと放り出す。
「ああんお兄ちゃん」
「暑苦しいわ！　とっとと行け！」
どうも遺伝子らしい。俺が女性の臭いに敏感なのも、妹が俺の匂いに執着するのも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2682z/

クーゲルシュライバー！

2011年12月20日01時45分発行